

令和2年度第2回堺市社会教育委員会議

開催日時 令和2年11月20日（金）午前10時04分～午前11時29分

開催場所 本館3階 第1会議室

出席委員 餅木議長、林副議長、小山委員、黒田委員、船橋委員、山口委員
（欠席 浅野委員、植木委員、佐伯委員）

事務局職員 田所教育次長、泉森地域教育支援部長、八木地域教育振興課長、
梶原地域教育振興課長補佐、寺園地域教育振興課管理係長、
藤田地域教育振興課支援係長、深澤地域教育振興課副主査、木村地域教育振興
課職員

- 案 件
- (1) 事務局からの報告
 - (2) 黒田委員による阪南市の事例紹介
 - (3) その他

（午前10時04分 開会）

○事務局（梶原課長補佐） 定刻になりましたので、ただいまから、令和2年度第2回堺市社会教育委員会議を開催いたします。

なお、本日の会議は委員9名中半数以上の5名のご出席をいただいておりますので、堺市社会教育委員会議規則第3条第2項の規定により、会議の開催が成立していることをご報告申し上げます。なお、小山委員につきましては、後ほど到着予定とのことですので、到着されましたら、6名の出席ということになります。

まず初めに、開会に当たりまして、田所教育次長からご挨拶いただきます。

○事務局（田所次長） おはようございます。教育次長の田所でございます。

令和2年度第2回堺市社会教育委員会議の開催に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

委員のみなさま方におかれましては、本日はお忙しいなか、社会教育委員会議にご出席いただきまして、ありがとうございます。また平素は社会教育行政の推進はもとより、様々な市政運営に何かとご尽力賜り厚く御礼申し上げます。

今年に入りまして、世界中に感染が拡大いたしました新型コロナウイルスの影響は、社会のあり方を大きく変えました。今、また第3波のさなかにあります感染予防と経済活動との狭間で、新しい生活様式を模索せざるを得ない状況が続いております。今年の夏の東京オリンピックが延期されたり、各種の体育、文化行事が中止になったりと、社会教育の全体の

あり方について、大きく変更を余儀なくされております。

しかしながら、人のつながろうという意識は非常に強く、各分野でオンラインを活用したつながりが生まれてきました。また、学校においても児童生徒に、一人1台パソコンを配付するGIGAスクールの前倒し実施など、学びを止めない環境づくりも進められております。

このようにあらゆる手段を通じてつながるための努力をしているということは、人にはそれだけつながりたい、社会基盤をしっかり持っておきたいという気持ちの証拠であろうかと考えています。

本日の社会教育委員会議では、感染予防対策のため、委員のみなさまの前に飛沫防止シートを置き、物理的なソーシャルディスタンスの確保をしておりますけれども、議論につきましては、心のソーシャルディスタンスを密接にしながら、意見交換をしていただければと思っております。

本日は、冒頭に事務局から報告の後、黒田委員より大阪府立大学と阪南市との取組内容のご紹介、今期の取組事項について委員間で議論されると伺っております。各案件について、それぞれのお立場から忌憚のないご意見をいただきたいと考えています。

本日はどうかよろしくお願いたします。

○事務局（梶原課長補佐） ありがとうございます。なお、本日は新型コロナウイルス感染症対策のため、ソーシャルディスタンスを取るということで、全体的に広めのスペースを取っております。また、飛沫防止シートを各委員の前に設置させていただいております。これもひとえに感染防止対策となりますので、ご理解のほどよろしくお願いたします。

ただいま、小山委員もご到着されましたので、本日の出席者は6名ということになります。

それでは、議長、進行をお願いいたします。

○餅木議長 みなさん、おはようございます。

議事に先立ちまして、本日林副議長が所用のために1時間の出席で退席されるということをお知らせいたします。

では、議事に入っていきます。案件1事務局からの報告、お願いたします。

○事務局（八木課長） 事務局より4点、ご報告させていただきます。

お手元の資料をごらんください。

まず1点目でございますが、令和元年度第3回社会教育委員会議においてご議論いただき、本年度第1回書面会議にて決定いたしました社会教育委員の学びの機会の件でございます。事務局で調整させていただきまして、本年12月23日水曜日、午後2時から4時におきまして劇作家・演出家の平田オリザ氏をお招きすることになりました。詳細につきましては、会

議資料の通知文をごらんいただければと存じますが、前半に平田オリザ氏より、兵庫県豊岡市の演劇教育やシティズンシップ教育など取組のお話をいただき、後半は社会教育委員や参加者も含めた活発な意見交換を予定しております。場所は、堺市三国ヶ丘庁舎5階の共用会議所でございます。教育委員会事務局の職員にも参加を呼びかけて開催したいと思っておりますので、後ほど内容につきまして議論をいただく予定です。

2点目でございます。本日この後の議事であります黒田委員による取組のご紹介でございますが、大阪府立大学と阪南市とで、大阪湾の環境を体験するイベント「2020年度海と陸とのつながりを味わおう」の件でございます。今年度は、全6回実施予定でしたが、新型コロナウイルスの影響により、第1回目の活動は中止となっております。

○事務局（八木課長） 残り2回、1月17日「海苔すきづくり」、1月24日「収穫祭」につきましては、現在のところ開催予定でございます。黒田委員よりご推挙いただきまして、社会教育委員会議といたしましては、1月17日の日曜日に視察させていただく予定でございます。各委員のご予定のご確認の件もでございますので、後日、改めて出席の希望についてお伺いさせていただきます。よろしく申し上げます。

3点目です。1点目と同じく、昨年度の社会教育委員会議においてご提案いただきました広島県への委員視察でございます。当初、広島県教育長の平川理恵氏との対談を初め、複数箇所の視察も含め模索しておりましたが、新型コロナウイルス感染症などの影響により、広島県教育委員会より現状においては対応が難しいとのご回答がありました。ですが、広島県内の福山市教育委員会の取組のご紹介をいただきまして、福山市と調整を進めているところでございます。当初予定していました全ての取組ではございませんが、広島県と福山市が連携して実施しております公立初のイエナ教育プラン校である常石小学校、広島県の寄附金を活用した学校図書館リニューアルプロジェクトを実施しております韮の浦学園、不登校をゼロにする取組であります校内フリースクール「きらりルーム」、この3点についてスケジュールを調整しているところでございます。

日程につきましては福山市教育委員会との調整次第ですが、来年1月下旬から2月上旬までで日程調整を行っているところでございます。日程が整い次第、委員へお知らせし、参加者の調整をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

また、先ほどご案内した2点、阪南市の取組、また平田オリザ氏の件も含めまして先方の状況やスケジュール、とりわけ新型コロナウイルス感染症の状況によりましては大幅な予定変更や中止とさせていただく可能性もありますので、あらかじめご容赦よろしくお願いいたします。

4点目でございます。今年度、新潟県で令和2年11月11日からの3日間で予定されておりました全国社会教育研究大会新潟大会につきましては、ぎりぎりまで開催の検討をされて

おりましたが、全国より多数の方がお越しになることもありまして、集合形式での開催は中止となりました。

議事内容につきましては、新潟県より資料が届いておりますのでお配りさせていただいております。ちょうど届いたばかりの資料になりますので、ご参考によりしくお願いいたします。

事務局からの報告は以上になりますが、内容につきましては、後ほど案件 3、その他で委員より意見をいただければと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。以上です。

○餅木議長 事務局から 4 つの報告がありました。最初の議題については、後ほど協議をしますが、何か別件もありましたら、よろしく申し上げます。

では、案件 1 については議事を終了したいと思います。

続きまして、みなさま、お待ちかねの黒田委員による阪南市の事例紹介をお願いしたいと思います。

黒田委員、どうぞよろしくお願い申し上げます。

○黒田委員 はい、申し上げます。ちょっとハードルが上がってしまっているんですけど。

○餅木議長 それは高いです。

○黒田委員 気楽に、リラックスして聞いていただければ幸いです。

それでは、阪南市と大阪府立大学が連携し実施しているプロジェクトについて、ご紹介させていただきます。

プロジェクトの名前が「漁業と魚食がもたらす魚庭（なにわ）の海の再生プロジェクト」ということで、大阪湾はもともと魚庭の海と言われておりまして、魚の庭ですね。先ほど雑談でも話になりましたけど、魚が多く住む、魚が庭としている海ということで魚庭と、いろんな、なにわの書き方、漢字で、当て字にもなりますけれども、そういう名前がついています。阪南市とのプロジェクトの詳しいところに入る前に、今、日本が置かれている漁業の現状と伺いますか、そういうところを初めにイントロダクションとしてお話しいたします。

このパワーポイントデータの図は国内で消費されている水産物ですけれども、この数十年で海面漁業、天然の魚ですけれども、それが頭打ちになっています。この青色の部分ですね。残念なのは国内自給率が 6 割ぐらい、恐らく今はもう 6 割も切っていて、こんなに海に囲まれている日本なのに、魚を自前で供給できてないというのが現状です。それだけじゃなくて何が供給を支えているかという海外産です。この緑の部分ですけれども、それが 80 年代ぐらいから急激に増えています。サーモンとか、海老とかもその辺りに入るかなと思いますし、これから増えていくのがこの養殖の部分です。近畿大学とか率先して養殖していますけれども、その辺りが現状になっています。要はすごくグローバル化しているんです。魚一つ

とっても、本当に世界でやりとりが複雑にされている。そういった現状になっています。

そのつながりで、日本人はじゃあ魚を食べているのか、食べてないのかというところで、恐らく大好きな国民だとは思いますが、実際、実は消費の現状としては、今、肉の方を食べている国民になっています。この白抜きのグラフです。青いのが魚で、黄色が肉ですけれども、1年間に一人当たりが食べる魚とか、肉の消費量を表しています。日本は世界的に見るとそれなりに食べています。ただ、世界トップクラスではあるものの傾向としては下がっています。自給率と一緒に2000年代ぐらいから急激に下がっています。それとは傾向が異なるのですが、世界のほうが徐々に増えてきています。それは徐々に裕福になっているという点もありますし、和食というのが広がって、魚のニーズが増えているというのも現状にあります。だから魚食大国日本とは、ちょっと言えない時代がきているんじゃないかなとなっています。魚はとるのも難しいし、とれないという事情もありますけれども、食べるほうも徐々に変わってきている。そういった現状になっています。

大阪湾の話が中心になるんですけども、どちらが大阪湾か、皆さんぱっと見て分かりますかね。左のほうが大阪湾で右が東京湾です。よく比較して出されるのは面積がほぼ同じだからですね。この概要がありますけれども、どちらが大阪湾か分かりますでしょうか。この左の1,400の面積とほぼ同じ1,380の面積ですね。いかがでしょうか。

ポイントは、この水深が浅いか、深いか、あとはこの5メートルより浅いところが多いか、少ないかというのが大きな違いになっています。これは絵と合わせているので、左が大阪湾なんですけれども、大阪湾は非常に水深が浅いですね。50メートルプールでよくたとえられるんですけども、そういうイメージです。だから非常に遠浅の湾になっています。それと閉鎖性ですね。この入り口が明石海峡と紀淡海峡というところで海流が出入りするんですけども、東京湾も含めて非常に閉鎖的な湾ということが特徴になっています。あとは5メートルより浅いところが少ないということは、要はほとんど埋め立てですね。埋め立てで全部海岸線を失ってしまった大阪湾ですけれども、東京は、実は結構干潟が残っていて三番瀬とか、磐州干潟とか、そういったところが残っています。大阪湾の場合は天然というか、人工の海岸線がほとんどで、自然は1%にも満たないような、そんなレベルです。非常に人工で固められてしまったのが大阪湾の残念なところになっています。

やっぱり埋め立てが多いと、なかなか近づきにくい、人が行っても危ないとか、工場が多いので、なかなか近づけないというところもありますし、汚いというイメージですね。60年代、70年代の高度経済成長で汚れてしまった海というイメージが大分残っています。きれいか、汚いかってすごく判断難しいところで、何をもってきれいかっていうのは定義としては難しいところですね。海水浴ができる海がきれいなのか、やっぱり魚が多くて豊かな、

ただ、プランクトン多くてちょっと濁っていても、それが豊かな餌が多い海と言えるのか、その辺りが難しいのですけれども。今、大阪湾で悩ましい問題としては、餌が多いのはいいんですけど、ちょっと多過ぎる。この赤いところが、窒素とかリンですね。栄養になる物質ですけれども、左が窒素で、右がリンで似たような傾向があります。それは湾の奥ですね。大阪市とか、あの辺が非常に赤いということは濃い、非常に栄養が多いという状態で、ただ、南に南西部に行くと徐々に薄くなっている。じゃあ何をいうかということ、栄養が濃いところ、なさ過ぎるところが非常に偏っているというのが、大阪湾の特徴になっています。この理由としては、海流がうまくめぐらない、関西空港がこうあってそこで止められるとか、いろいろ問題はありますが、この栄養が多い、少ないというのが今大きな問題になっています。

栄養が多いと、それを食べる小魚がいて、その小魚を食べる魚がいてという食物連鎖が続きますが、あまりに多いと、その窒素とかリンを吸収して増えていく海草、これ阪南2区という人工干潟のところですが、こういう海草が増え過ぎちゃって海岸線に打ち上がって、腐っていった臭くなるとか、景観が悪くなるとか、そういった問題もあります。

これがかなり以前から海の研究者、沿岸域の研究者から、何とかしないといけない問題とされていたんですけども、ここ4、5年は、栄養が少ないということも非常に問題となってきました。大阪湾だけじゃなくて播磨灘のほうもそうだし、有明のほうもそうですけれども、栄養が少ない大阪湾では数は少ないですが海苔、後で阪南市のところでも出てきますけれども、海苔の養殖を3軒の漁師さんがやっています。海苔はそういう窒素、リンを吸収して、光合成して成長していきますので、栄養がないと海苔の色が非常に淡い色に落ちてしまいうんです。本当は真っ黒なのがいい海苔ですね。海苔は入札で大体価格が決まっていますが、左は大体通常のいい海苔です。ただ、この2年後にイベントで行ったときはすごい色落ちていて、やっぱり味もその分落ちているなという感じがしています。これは、今抱えているかなり大きな問題となっています。問題ばかり言ってもちょっとネガティブになっちゃうので、実は大阪湾ってこういう面があるよというところをご紹介したいと思っています。

一つは魚ですね。実は全国トップクラスの漁獲量の魚もありまして、ここに上がっているのは、4、5年前のデータなので、古い面もありますけれども、大阪湾と言えばイワシがかなり獲れていて、イワシの子どもであるシラスとかが非常に、実は有名です。ここに4つぐらい魚を記載したんですけども、みなさん何の魚か、サイズがまちまちで合っていないので想像しにくいかもしれないですけども、イカナゴとか、カタクチイワシ、あとマイワシも獲れるんですけども、あとクロダイ、チヌって言われている魚です。あとはスズキも、ずっとこれは江戸時代とかも昔から食べられている魚です。実はこんなに大阪湾で漁業をしていて、おいしい魚があるということが、知られていないということが残念ながら現状になって

います。

その問題の背景としては獲る漁師も少ないことです。獲れない、天然の魚が獲りにくくなっている環境にはなっていますが、漁業者が減っています。今 1,000 人を切っていて、それはやっぱり漁業につきまとう 3Kが要因と言われています。きつい、汚い、危険という、その跡継ぎをわざわざ漁師自身が子どもにさせないということもあるので、高齢化も進んでいますし、また外部から参入しにくい環境も漁業者が作っているのです、なかなか次の世代に行きづらいというような環境になっています。

ただ、すごく大阪湾の漁業協同組合、上は大阪市の漁業協同組合、ここは川魚がメインですけれども、ここから下は小島かな、丹沢かな、その辺りで岬町のところに至るまで 20 ぐらいの漁協があつて、それぞれがライバル同士で競っているというのが現状なんですけれども、非常に都市型漁業と言われていて、立地がいいんですね。阪神高速がすぐ近くにあるので獲れた魚もすぐ運べる。そういったところで大阪湾の都市型漁業というのがメリットというのもあります。なかなかまだプロジェクトには至っていませんが。

獲る人たちの話の課題もあつて、今度は食べる人たちの話ですね。さっき肉がよく食べられているという話をしましたけども、このプロジェクトでアンケートをとって、堺市民と泉佐野市と阪南市と、いろいろ比較しましたが、大阪産（もん）の魚を食べたことがあるかどうかというアンケートで、泉佐野市とか、阪南市に比べると、圧倒的に堺の方は少ないですね。なので、堺は漁港もあつて一番アクセスもいいのに、もったいないな、これ残念だなという結果になっています。やっぱり泉佐野市より南に行くと海が近いといいますが、見た目にもきれいです。阪南市でもきれいな方ですけれども。そういう魚への関心というか、日常的に食べる魚としても、地域によって結構違いがあります。おいしいから買うという人も堺は少なく、もうちょっと堺の方に大阪産（もん）のおいしいところを紹介したいなどは常々思いますが、こういう現状になっています。

その背景の一つが、イメージですね。やっぱり水質が悪いんじゃないかとか、何か大阪で魚が獲れて、それを食べるという、地魚を食べるという行為が完全に薄れていっているような、文化が薄れていっているような感じが、ここ数年、こういう活動していて非常に感じる場所です。

イントロが長くなりましたけど、ここからプロジェクトですね。こういったいろんな問題背景があつて、こういうプロジェクトが発足したと。これは大阪府立大学と阪南市だけじゃなくて、フィールドは阪南市ですけれども、特徴的なのは非常にいろんな人が関わっているということです。主な研究実施者というのが大阪府立大学と太平洋セメント株式会社というセメント会社です。あとは、NPO法人大阪湾沿岸域環境創造研究センターという、環境イ

ベントとか、環境教育をされているNPO法人です。大阪府立大学の太塚教授が代表者になってほぼ3年半やっています。一応、お金は国の文科省の傘下にあるJST（科学技術振興機構）というところから頂いて、この3月に予算は途切れてしまっているんですけども、引き続きフィールドとして活動しています。

阪南市ですけども大阪府の南にあります。行かれたことある方がいるかもしれませんが、大阪府立大学からだと阪神高速湾岸線を使って車で1時間ぐらいかかります。人口が5万人ぐらいの規模の自治体でして、比較的小規模な市ですけども、漁協が3つもあります。尾崎、西鳥取、下荘という、南海電車の駅、尾崎駅、鳥取ノ荘、箱作のそれぞれに一つずつ漁協があります。これは昔の阪南市になる前の阪南町で、その前は村が4つぐらいあったんですけども、そこに一つずつあった漁協がもとになっているため、かなりライバル視して、西鳥取だけでやっているとほかの漁協との関係がという、かなり難しい状況でプロジェクトは進んでおりますが、みなさんと中立な立場をとりながらやっています。

阪南市のすごく面白いというか、いいところは海にも結構アクセスがよくて、逆に山も豊かな、食べ物も豊かで、山中溪とか、観光名所もありますし、ベッドタウンとして利用はされていますが、そういった海の幸とか、山の幸というのが、実は隠れてあると、そういった阪南市、結構おいしいものが多くあります。今回は魚の話なので、サワラは大阪府下でもトップクラスで売られています。結構高値でサワラは売れるので一押しの魚なんですけれども、あとはシタビラメとか、よくムニエルとかでされるアカシタ、アカシタって私たちは呼んでいて、それは年中とれるので非常にいい、おいしい魚です。あとワタリガニというのは祭りのときに使われているようなものでして、本当に少量ですけど、多品種の魚が獲れています。あと浪花正宗という酒蔵です。それもありますし、最近「なにわ黒牛」という山のほうで牛を育てていて、なかなか脂身が非常に多くて、非常においしい牛肉で、ふるさと納税とかももしかしたらされているのかなと思います。

みなさんに一押しなのが牡蠣小屋です。冬季限定ですけども、もともと2015年ぐらいに西鳥取で始めて、それから結構テレビとか、新聞とかに取り上げられて順調に客足が伸びていると思います。牡蠣飯とか、蒸し牡蠣ですね。あと、牡蠣フライとか、この阪南市で獲れたワカメのみそ汁とかですね。そういった牡蠣セットみたいなものが結構低価格であって、非常に好評です。昨年からは下荘でも牡蠣小屋をしまして、今年コロナ禍の影響で実施するかどうか悩んでいたそうなんですけど、実施するみたいなので、もし機会がありましたらぜひ行っていただければなど。この右のほうが獲ってきた牡蠣です。

そういった背景の阪南市ですけども、このプロジェクトのコンセプトとか、活動ですね。いろんなグループに分かれてやっていました。イントロでちょっとお話したように魚って非

常に複雑です。獲る魚がないというのも問題だし、それを獲る魚の漁師がいないというのも問題だし、獲ってもうまく流通してなくて、食べる人がいないと全然回らないので、今まではどこかにフォーカスしたプロジェクトとか、研究が多かったんですけども、今このプロジェクトでは、獲るところから食べるところまで全部を一括して一通りやろうよというのが結構特徴的な内容になっています。

まずは、その阪南市を中心に、魚庭の海として再生して、地魚や大阪湾に親しみをもってもらおうというところから始めて、それが阪南モデルと言っていますが、それが確立するとほかの都市型の堺も含めて広域に広がっていきませんかという話から、こうなっています。

プロジェクトの実施体制ですけども、総括するメンバーがいて、グループとしては生産・漁獲グループ、獲る環境で漁師を増やしていきたいなというグループと、あとはうまく流通させるグループと、その消費、食べる人に地魚への興味もってもらうことを目的とするような消費グループと分かれてやっています。大阪府立大学は、この各グループに入りながら活動しているんですけども、客観的に、いろんな評価というのをして、フィードバックしながらプロジェクトの立ち位置をさぐっていく、成功しているかどうかというのを見ながら進めてきたというのが現状です。

この協働の形が非常にユニークだと思いますども、阪南市だけじゃなくて、3 漁協、最初に行ったときは何者やみたいな感じもありましたが、通っていくとなかなか理解いただいてきて、今は親密になってきています。あとは、阪南市にある小学校です。関西大学北陽高等学校というのが、後で消費グループのところで出てきますが、地魚レシピと一緒に、若者と作るということをやっています。あと「藤左エ門」というのが阪南市にある魚の卸売の専門の店です。関西よつ葉連絡会というのが流通面で、宅配というのですかね。今、結構流行ってきていますけれども、コープみたいなネットスーパーをやっている団体です。あとは「空（テイケイ企画）」という、大阪の市内を中心に地魚とか、大阪産（もん）の野菜、地場の野菜を使った外食を広めているような飲食店とか、いろいろあの手この手で協力しながら進めてきています。

このプロジェクトは、いきなりぽっとできたわけじゃなくて、結構いろいろ前段階がありました。もともと私はそこまで阪南市と関わりがなかったんですけども、知り合いの研究会で会ったNPOの方が、そこで、アマモという海草ですね。アマモの種付けをボランティアでしていました。そこから阪南市が、徐々にフィールドとして固まってきて、今日もご紹介する「海と陸のつながりを味わおう」というイベントが2014年にスタートしました。それから私が行って、初めは社会貢献で行っていたんですけども、漁業者さんと直接話すな

かで、研究者としては海環境、再生と思っていましたが、中身の魚を食べる人がいないとか、魚がとれないとか、人の問題というのですかね。人視点の問題というのが非常に興味深く感じまして、漁業、魚食までつなげていく必要があるというところから研究することになりました。

このJST（科学技術振興機構）のプロジェクトですが、初めの申請では採択されませんでした。次点で、ここをもうちょっと改善してくださいと言われて、検討してもう一回チャレンジして採択されましたが、まず形から入っていこうということで、大阪府立大学と阪南市が産学官の連携協定を作って、非常に活動しやすいように回りを固めていきました。一番よかったというのが漁港のなかに実験施設を建ててもらって、小さいプレハブの建物ですけども、そこを拠点にいろいろ活動できたというのは非常に活動しやすかったですね。そこにいて話しかけられることもありますし、いろいろ機材も置けるので拠点ができるというのはすごくいいことだなと思いました。

一応、事業予算が終了して、事業としては撤退していますが、その活動拠点をNPOが引き継いで、私たちもそこに行かせもらって活動のフィールドとして、まだ続いています。

ここから各グループについて説明します。まず、生産・漁獲ですね。次が流通、消費と至りますが、生産・漁獲というのは、いかに漁師が楽に魚をとれるかということと、環境の変化というのもあって漁場に魚が住みにくくなっていますので、いかに魚を呼ぶかと、そういうところから、この魚のアラの煮汁というのは分かりにくいかもしれませんが、魚粉とか、フィッシュミールとかお聞きなされたことがありますか。魚の食べたアラ、ごみを処理して、煮立てて、絞って、こういう煮汁というのが出てきますが、固形の部分はフィッシュミールとして養鶏場とか、今は魚の養殖場の餌になっていたりしますが、この煮汁部分にアミノ酸という、たんぱく質が結構入っています。製造工程で出る副産物の煮汁は本来、要らないものですが、その捨てられるものを、木くずにしみ込ませて、ここは太平洋セメントさんが特許を持っていると思うのですが、セメントでコーティングして、こんな小さい2、3センチのボールに加工したんです。これを「マンテンマル」というのですが、それを海に沈めるとじわじわとたんぱく質が出てきて魚が寄ってくるという、そういう効果があるので、この右下にあるタコツボマンションというタコが住めるような家を、マンションを作って海底に沈めて、そのなかに「マンテンマル」を放りこんで、タコがそこで産卵している、というのが1件だけ確認できたという事例があります。それを親子のイベントと一緒に作ってもらって、やってもらったんですけども、ただ、タコって結構きれいなところしか住まないみたいで、海底に沈めると、海流で、タコツボマンションのなかが砂で埋まっていくんです。だからすぐタコが逃げていくという問題があって、定期的にメンテナンスが必要ですけ

れども、こういう試みというのもしました。

流通のところでは、堺市の方があんまり地魚に興味ないというか、魚を買わないのは、そもそも買えないんですね。スーパーに売ってないというのも大きな問題で、やっぱり阪南市とか、泉南のほうだとちょこちょこ売ってはいるんですけども、スーパーの魚のバイヤーによるので難しいところですけども。インターネットで気軽にスマートフォンとかで注文して、地魚を買えるような仕組みを作りたいなというところから始まりました。「サイバーマルシェ」という名前でやって、今コロナ禍でかなり大きく環境が変わってきたなと感じていて、今までは鮮魚とか、生鮮はあんまりインターネットで買わなかった人が、結構徐々にですけど増えているので、そういうところの波に乗っていったらなとは思ってはいるんですけども、ただ単に、インターネットで買う仕組みだけじゃなくて、デジタルカタログという、魚のニッチな情報とかですね。アカシタ、シタビラメだったら、ニッチの情報ですね。こんな方法で獲れているとか、漁師さんのおいしい食べ方を載せるとか、そういったリアルタイムな情報を載せていって、もう一つはレシピも載せることで、この魚はどういうふうに乗らたらおいしく食べることができるだろうとか、そういったいろんな情報を載せて、消費者さんが地魚に親しみをもって買いやすいような、その様な試みもやりました。ただ、これはモニター数名で2回ぐらいしかやってないので、なかなか商業ベースという話ではありませんが、こういう試みもしています。

ただ、テスト運用では結構評価がよかったですね。スーパーと比べるともちろん新鮮だし、おいしい、あとは安心だという声もあってですね。1回目は本当に宅配便で送ったんですけど、2回目のテスト運用は対面で受け取りにしました。その際に魚屋さんがこうやって食べたらおいしいよとか、そんな指導のようなこともあって、それがすごく印象に残ったというコメントがありました。今は、スマートフォンとか、デジタル化の時代になっていますが、結局はその人と人とのコミュニケーションというのですか、そこに戻ってきているなというのが、融合というか、そういうのが非常に印象的な試みの一つになっています。

次に、消費ですが、これはご紹介にもありましたけども、「海と陸のつながりを味わおう」ということで、今年是一回目の田植えだけがコロナの影響で中止になったんですけども、2回目以降は何とか実施しています。この取組の面白いところはお米を作ってですね、海苔も作るという、なかなか味わえない体験をしていただいて、最後はやっぱり食べると、作って自分で食べるというところにも持っていく、それが6回シリーズで連続して同じ参加者がきます。大体10世帯、15世帯ぐらいですかね。じゃないとやっぱり結構キャパシティもあって難しいですけども、いつも1日、2日で定員が、満員になるというような結構人気のイベントですけども、リピーターが多いと思います。この取組の狙いは栄養が循環する

森、川、海というものありますけれども、海は海だけじゃなくて、陸から栄養をもらって循環しているんだよと、そういったことを恐らく小さい子どもは分からないと思いますけども、子どもじゃなくて親に言って、親がそれを実感してもらって、そこを狙いにしています。かなり体験型としては面白いイベントで、これも評価という面でアンケートしながらですね、大阪湾のイメージがどう変わるかな、みたいなことを行っています。

5点満点で、5点が一番きれいとか、自然的とか、ポジティブなイメージの点数ですけども、親しみとかですね。本当はきれいなんやという、見た目のきれいさじゃない、きれいさを多分感じていただいているのかなとは思いますが、そういったイメージが変わるようなことも回数を増やすと見られるということも分かって、これが大きな収穫だったなと思います。

この消費、実際にほかのイベントもやっています、「HANNANキッチン」って親子の料理教室ですね。これはクリスマスとか、特別なところでやるとか、地元の簡単なおかずを漁師さんが自ら教えるとか、そういった「HANNANキッチン」という料理教室もやって、地魚を購入する意欲をかき立てるような取組もやりました。

あとは関大北陽高校というところがあって、その調理部の方と一緒にレシピを開発して、若者でも地魚に親しみもてるようなメニューを高校生目線で作ってもらいました。そういった地魚への親しみを促すようなこともやっています。

最後に評価という面で、いかに地魚がいいかというのは、その文化を継続するというだけでなく環境面でもいいですよ。ノルウェーとか、非常に遠いところから来たサーモンを食べるのもおいしくていいんですけども、たまに地魚を食べることで環境、特に今はCO2のことも毎日、毎日ニュースで聞いていますけども、そういう低炭素という要素ですかね、そういうインパクトもあるんだよというのを数字で表しながらアピールしたり、そういうこともしています。

これはちなみにサケとかマスで、海外産よりも国産の、もちろん天然が一番、環境負荷が少ない、というデータがあるのですが、そういったことを調べたりしています。研究レベルになってしまいますが。

ちょっと駆け足になってしまいましたが、これをどう堺市の社会教育につなげられるかなということを考えてみたんですけども、私はいつもSDGs 14番を堺市でもっと増やしてほしいなと思っています。海はほかのことともつながっているので、14番のことだけじゃないですけども。繰り返しになりますけど、堺市と海、実は非常にアクセスがいいので、「海洋教育」というのは実際のハードルが高いかもしれませんが、海、陸のイベントでやったような、インフォーマルというイベントですね。そういった環境イベントというの

は結構柔軟性が高いので、こういう阪南市の事例というのが生かせるかなと思っています。

2 つ目が、子どもから大人へ結構波及効果があるというのが、特に環境教育の現場で言われているようです。だから子どもが家へ帰ってきて、親にこんなことがあったよと、親がそれに関心を持って、親にもその効果が波及することも研究レベルで調べられていますので、小中学校で海洋教育を行うのは難しいと思いますが、普及していただいたらいいなと思っています。実際、阪南市は、海洋教育パイオニアスクールという取組を実施してまして、それこそアマモの種付けとか、そういった頃は小学校の後半かな、漁師さんが学校にきているお話伺ったりするとか、そういう取組もされているようなので、それも一つ参考になるかもしれません。

最後に海辺に行くことですね。そこへ行くとやっぱり自分の生活と海がどうやってつながっているのか、かつ地域の結びつきというのがこういうイベント化すると高まるので、そういった活動をする、何かこの地域が自分ごとのこととして思える。そういうきっかけ作りにもなると思いますので、そういうところで社会教育というのが役立つのではないかなと考えています。

ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

○黒田委員 波有手（ぼうで）って、西鳥取の、昔の波有手村というところで、波、有、手と書きますが、この波有手の海はかなり遠浅なんですね。かなり向こうまで子どもでも行くことができます。子どもの腰ぐらいの高さですずっと行けるぐらいの海があって、非常に親しみやすいのが特徴的な阪南市です。堺市では難しいかなと思いますけれども、数十キロのところに、そんなところがあるので、事例の紹介として入れさせていただきました。ありがとうございました。

○餅木議長 黒田委員、ありがとうございました。

○黒田委員 ありがとうございます。

○餅木議長 いろいろ知らないことだらけでした。

○黒田委員 ちょっと駆け足になってしまいました。

○餅木議長 東京湾と大阪湾の深さとか、大阪湾はもう埋め立てばっかりだとか。埋め立てで、結局海に近くななくなりました。もともと浜寺は東洋の何とかがっていうぐらいのところだったと記憶していますが、惜しいことをしたなという気はします。何かまたもっと海に近づいたら本当にすごい財産があるのに、それを活かしていないというところがあるので、何

かこういうことをきっかけにしながらマルシェのような、大阪って言えば何とかですよ、みたいな食べ物ができたりするのではないか、そういう夢が広がるお話だったと思います。

みなさんからご意見、ご感想、ご質問とかありましたら少しだけ時間をとりたいと思いますけれども、いかがでしょうか。林副議長。

○林副議長 大変貴重なお話ありがとうございました。

この海とか、それと農業というのには、ものすごく教育的に豊かな資源があって、それは学校ではなかなか実現しにくくて、でも社会教育的にできるということもすごく参考になりました。

知りたいことはいっぱいありますが、そうですね。ふだん会議とか、つながりができた場合は、例えば会議が定期的に行われているのかなとか、どういう感じでみんなが集まっておられたりするのかなということ、知り合うきっかけや、定期的に会議が開かれているのかということと、あともう一つ、このプロジェクトとかできたつながりが、ほかでも何か発展していったという例がもしあったりしたら教えていただきたいのですが、どんな感じですか。

○黒田委員 1点目、このプロジェクトのコアメンバーの会議はやっているんですけども、ここでご紹介した人のつながりというのは、結構自然発生的というか、誰々の知り合い、誰々の知り合いというのがご紹介していただいてつながったりはしています。

基本そのイベントもボランティアでみんなやっています。プロジェクトのメンバーだけでは足りないのが、それも自然発生的に集まってくるというのが、何でそんなにみなさんボランティア大好きなのかは分かりませんが、きっかけが何かというと、説明がしにくいのですが、自然発生的に人のつながりから、プロジェクトがうまく成り立っていたというのが、阪南で実行できた要因の一つかなと思います。

この取組、つながりとしては、まだ阪南市でやっという感じですね。スタート地点に立ったというところで、そこからつながりどううまく生かしていくかというのは、次の課題かなと感じています。

○林副議長 ありがとうございます。

○餅木議長 山口委員。

○山口委員 堺市も伝統的なお祭りで「堺大魚夜市」があります。

○餅木議長 すごくお祭りですよ。

○山口委員 昔は堺の浜で、大浜で地引き網を見ながらお祭りをしていて、それが夏の一大祭りになっていますけど。

○黒田委員 ありますね。

○山口委員 20万人ぐらい大勢人が集まります。市民に限りませんが。

黒田委員が今日おっしゃったマルシェについても、堺港のほうで定期的かどうか分かりませんが、とれとれ市というのをやっているんです。

○黒田委員 はい、とれとれ市。

○山口委員 いろいろ市内の内陸部で行う、例えば商工会議所のイベントですとか、堺の区民祭りとかにも漁協さんが店舗、テント一張りですけど出しているし、堺大魚夜市も私達も協力してね。

○山口委員 年々、お魚の種類とか、数は減ってきているんですけど。結構しんどいところがあるんですよ。毛ガニがあったりね。

○黒田委員 そうですね。ホタテとかね。

○山口委員 これ大阪湾のものと違うでしょうと。漁協さんも協力もしてくれていると思いますが。ちょっとその辺は阪南市みたいに、目的をもって祭りもできればいいんですけど。やっぱり社会教育としてももう少し、広げていけたらいいなと。いろいろ難しいとは思いますが。先生が抱えておられる、ご体験されたお悩みも痛いほど分かる感じですが、それを乗り越えてこういう「つながり」を持つというところで、社会教育がどういう役割を果たせるのかなというのは思います。

○黒田委員 そうですね。

○山口委員 またSDGsをもとに考えていけたらと思います。

○黒田委員 そうですね。大魚夜市は、私も学生と、毎年楽しみにして行くんですけども、ホタテ、カニとかが売られているのを見ると、やっぱり大阪湾の魚をみんなで研究していますので、何かちょっと違うかなと思ったりもしますが。

○事務局（田所次長） 昔はね。いけすでやっていましたもんね。

○黒田委員 そうですか。

○山口委員 そうそう、昔は生きたタイやタコを売っていました。

○事務局（田所次長） もう30年ぐらい前かな。

○山口委員 そうですね。

○黒田委員 イベントも大事ですけど、それがどう日常的に自分の食生活に結びつくかなというところが、社会教育の見どころかなと。

○山口委員 だけど一方で、クリーン作戦で大和川にアユが帰ってきているとか、そういう話もあるじゃないですか。でも、やっぱり消費者のほとんどは、堺が公害のまちだったときの海の底のヘドロとか、そういうのがずっと記憶に残っているんだと思います。だから、やっぱり海が、黒田委員のおっしゃるきれいというより、いい魚おるよ、安全だよということを、社会教育を通じてお知らせするという事は大事なこともかもしれません。

○餅木議長 正しい認識というのは事実として、そういう魚は食べても安全で、新鮮は間違いないので。

先ほど黒田委員がおっしゃったノルウェーからの長距離輸送によるCO₂ という大きな問題ですが、これは私の大学院のゼミ生で松原市の数学の教員なんですけど、そういったことを教材にして、「ジグソー」という、それぞれがもつ情報をバラバラにして勉強させて、まとめてということのなかで、まさに低炭素社会の、そういう教材も作って授業していました。いい授業でした。

そういったことも簡単に言ってみれば、中学校の校長でもある船橋委員がいらっしやいますけど、1 単元、そういうものを入れるだけで子どもの認識も変わるしということありますので。

確かに山口委員がおっしゃるように、社会問題みたいなものもしっかり考えてつなげたい。つながるといいですね。ありがとうございます。

小山委員、何かありますか。

○小山委員 知らないことばかりで驚きました。とにかく心に残ったことは、生産、流通、消費、そして一般市民、みんながつながっているというところが、すごいなと思いました。その「つながり」がだんだん広がっていく、先ほども山口委員がおっしゃっておられましたが、堺の魚市もお祭りのときだけではなくて、こういう「つながり」を作っていないと広がっていかないなという気がしました。これだけの広がりを作るのに何年ぐらいかかったのでしょうか。

○黒田委員 スタートが2016年ですけれども、私が行き出したのが2014年からです。そのプロジェクト申請するために、2015年にいろいろ漁協さんとか回ったりしましたので、実質ここまでくるのが4、5年ですね。

○小山委員 すごいですね。4、5年でここまで広がるということはね。また、たくさんのボランティアの方が活動されていることにも驚かされました。阪南市のみなさんがそれぞれの立場で「どうにかしたい」と必要性を感じ、動いておられることが伝わってきました。堺市でもこのような動きの輪がひろがっていったらいいなと思いました。

始めに、黒田委員からお話を聞かせていただいたとき、小学生や中学生と関わり「海の環境を考える」「海をきれいにしよう」といったプロジェクトなのかなと思っていました。

今回、お話を聞かせていただき、環境はもちろん「獲るから、食べる」の一連のつながりを産官学の連携の元、市民とともに考え、市民を動かしていくプロジェクトだと言うことがわかりました。年に1度の堺の魚市だけでは、海の環境問題や「獲るから、食べる」など、市民がつながり、共に考え、行動するまでにはなかなか至らないなと思いました。

○黒田委員　そうですね。

○小山委員　「市民を動かす」漁業・企業・学校など、それぞれの関係者、市民のみなさんになりますが、どのようにつなげていくかというのが難しいですけど、面白いですね。どのようにしていったら広がっていくか、考えさせられました。ありがとうございました。

○餅木議長　ありがとうございます。ロコミというのはものすごく大事だということも、今おっしゃっていただきました。

○黒田委員　そうですね。

○餅木議長　だから、広報でいっぱい出して、大魚夜市を楽しみにして行くというだけでなく、何かロコミで広がっていく、そういう力って大事ですね。ありがとうございます。

船橋委員、何かありますか。学校のことなど。

○船橋委員　今、カリキュラムマネジメントで教科の枠を超えた教育計画というのを、どこの学校でもやっていこうということになっています。堺市で漁港の近くにある大浜中学校や浜寺中学校であれば、こういうことも身近で、中学校と小学校の校区単独でやることもできると思うんです。けれども、私が所属している津久野中学校は海には面していないので、このようなイベントにどうやって参加していこうかと考えてみれば、津久野中学校区には石津川が流れています。この川の流れが大阪湾にどういう影響を与えるか、というようなところを、各小学校区や中学校区で一つテーマを掲げて、堺市全体で取り組んでいくことは可能かと思います。そのように市全体で取り組んでいくのであれば、学校教育だけでは厳しい部分があるので、やっぱりこういう社会教育委員会議の場というか、社会教育とか、そういう場で各校区の役割であったり、実際それを全ての校区で共有していくというような活動が、堺でもできればすばらしいなと思います。

○餅木議長　ありがとうございます。教育でもそういう可能性があるのと、だけどやっぱり支えるものがあるんだということですね。学校だけではできないということも、逆に言ったらつながりたい市民もいるでしょうね。ありがとうございます。

黒田委員にもう一度拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

○黒田委員　ありがとうございました。

(拍手)

○餅木議長　気持ちが熱くなりました。

では、案件2は終わって次に進みたいと思います。

本日議論したいのは3点、一つは平田オリザさんの来堺ですね。それから福山市への視察という件について、それから今期の取組をどうまとめるかという、総括に向けてという、こ

の3点でご意見をいただきたいと思います。

まず、1点目ですけれども、平田オリザさんに来ていただけるということで、驚きましたけれども、本当かという感じがしていたんですが、我々のために来ていただき、そして教育委員会事務局のいろんな方が一緒に学んでもらうということでございます。

先ほどのお話であったように、豊岡市で演劇教育をされていたり、シティズンシップ教育も造詣が深いということなので、そういった話をさせていただく、そのときに意見交換で質問する内容だとか、出していただければと思いますが、どのようなこととお話しいただいて、そして我々はどんなことを深めていきたいのかということで、ご自由に言っていただければと思います。

○山口委員 議長すみません。林副議長のお時間がないので。

○餅木議長 そうですね。最初に意見をお願いします。

○山口委員 これに限らず、あと二つのことも含めて林副議長のご意見を先に聞かせていただいたほうが。

○餅木議長 それがいいですね。

○林副議長 平田オリザさんに関しては、今、演劇の取組とか、芸術的な表現活動という点では、堺では登美丘高校とか、いろんなダンスであるとか、活動をしている人も一緒に見ていただいて、堺の強みをどのように発展させていったらいいのかということができたらいいなと思います。シティズンシップであれば、堺市議会の高校生みらい議会の取組とか、もしくは中学校の生徒会とか、そういう実際に活動している人も平田オリザさんにいろいろ見てもらうということで、生徒自身の成長のきっかけになるのかなと思います。

それからですね。あとは、今後こうやって我々が視察で得た成果とかですね、これを市民の、多くの方々に還元していくという方法で、一つは今までやってきた「ぶらり社会教育」のような取組を、各委員が書いたりするという、これも大切かなと思いますし、もう一つは結構若い方々は、私達がテレビを見るような感覚で、普段YouTubeを見て生活しているところがあるので、YouTubeで簡単に社会教育を見て学べるようなチャンネルを作ると、もっとより多くの人たちにつながるのではないかなと、せっかく福山市に視察に行くのであれば、福山市の様子を、委員さんがYouTuberで様子を発信したり、大学の教員は最近そのようなことばかりやっていますけれども、そのスキルをここでも還元できたらと考えました。以上です。

○餅木議長 ありがとうございます。いろいろなことを考えていただいているので大変心強いです。平田オリザさんのこと言えば、堺には堺の取組があつて、お聞きして終わりではなくて、堺の取組を逆に発信して、それに対して意見をいただくというのがいいのではないかと

というご意見でした。

どうですか。中学校の生徒会とか、子ども未来議会は山口委員にやっていただきましたけど、そういったことを一回やって、その後なかなかそれが継続してということがないですけども。それをどの様につなげていったらいいか。そういうご提案でしたけど、それも含めてご意見ありましたらどうぞお願いします。

○山口委員 堺市の財政状況が急激に悪化していて、経常収支比率が 100.7 です。100 を超えました。ということは経常にかかる費用のことですね。特に市職員の人件費ですとか、市民の扶助費が、みなさんからいただいている税金や国からの交付金では賄えなくなってきている状況のなかで、来年度予算、再来年度の予算に向けて、市は今までの事業のシーリングより、厳しいカットをされていくと思います。

その様な状況でやっぱり一番弱いというか、命に関係ないという観点から、本当はそうじゃないんですけど、社会教育とか、教育、余分な教育とかいう言い方をされますけど、実は違います。やっぱり社会のつながりとか、社会教育ってすごく大事です。

何が言いたいかという、平田オリザさんには、以前私は提案したと思いますが、今、林副議長がおっしゃったように堺が持っている文化芸術、歴史的な、あるいは財産、古墳群です。世界遺産も含めて、これらをどんな「つながり」をもって大事にしていけるか、持続可能にしていけるかという視点でのお話、そこはやっぱり人と人との「つながり」が大事で、それがやっぱり社会教育の分野ですよ、というような落としどころでやっていただけたらなと思います。

○餅木議長 ありがとうございます。

○山口委員 この社会教育委員会が積み重ねてきたことが、予算がないからどうのこうのではなくて、それなぜ大事なのかということ、やっぱり平田オリザさんから教えていただけたらなと思います。

○餅木議長 確かに削りやすいところだけでも、削ってしまうと後なくなってしまうという。それはあると思いますので。そこはくれぐれも。

○山口委員 そうなんです。だから、私たちも逆に今までどおりの予算を要求したところで無理なので。このコロナ禍でちょっと変わってきた、AI ですとか、ビッグデータとか、リモート会議とか、サイバー空間ですよ、これからは。教員次長のご挨拶が心に響きましたけど、ソーシャルディスタンスはできるだけ離れて、心のソーシャルディスタンスは近づけて、もうめっちゃかっこいいなと思ったんですけど、ぜひ Facebook に載せようと思います。そういうスタンスがすごく大事だと思います。

○餅木議長 ぜひ、その辺りのことを、また質問に変えていただいて語っていただくと、その

なかには、やはり社会教育は重要ですよということを言っていただけるように、大事なご意見をありがとうございます。

○船橋委員 堺市の中学校には演劇部のある学校が何校かあります。本校にはないんですけども。そういう顧問の先生やあるいは生徒会、生徒会のつどいというのは堺市が全国に誇れるイベントだと思うんです。そういう生徒会の中心の先生であったり、我々みたいに校長で、これから教育を去っていく人間ではなくて、やっぱりこれからの堺の教育を支えていく、そういう演劇の中心になっている顧問の先生であったり、生徒会の中心の先生に、ぜひこういう平田オリザさんの講演会にきて勉強していただいて、社会教育と力を合わせてというようなことを考えていただくと、非常に学校教育にプラスになるかなと思います。

○餅木議長 さすが将来を見据えられている。なかなか勉強する機会がないですからね。

○船橋委員 そうですね。演劇部の顧問の先生にも聞いていただいた方が、絶対堺市の生徒のプラスになると思います。

○餅木議長 ありがとうございます。日程は決まっておりますけれども、ぜひ、そういったことを紹介していただいて、できれば校長会でも少し一言お伝えいただければありがたいなど。

○船橋委員 議長と事務局の合意があれば、校長会で、このイベントに何名か、密になるということがやっぱり今できないので、顧問の先生とか、参加をお願いしますということで提案させていただきます。

○餅木議長 ぜひ、実現できるようによろしくお願いします。

○林副議長 よろしいですか。

○餅木議長 どうぞ。

○林副議長 それに関連して、もし生徒が会場に集まれなかったら、中継という形でやって質疑応答とかしてもらったりできればいいと思います。

今、船橋委員のお話を聞いていて思ったのが、やっぱり普段演劇を指導している先生方にとっての演劇指導の意味付け、平田オリザさんに単に演劇が上手になるということだけじゃなくて、それがコミュニケーション力や将来の市民を育成するというものにもつながるんだという、そういう感じの意味付けを平田オリザさんのような方から言っていただくと、さらにいいのではとは思いました。

○餅木議長 ありがとうございます。演劇をやっている子どもたち、船橋委員はよくご存じですけども、なかなかいろいろ辛い思いをした子どもたちもたくさんいる。

そういったことも含めて、ぜひ、お話もお聞きしたいですね。ありがとうございます。

中継というのは可能ですか。

○山口委員 可能ですよね。リモートで。

- 餅木議長 堺市のインターネットは使えますか。
- 事務局（泉森部長） 調整させていただきます。
- 餅木議長 そうですね。
- 事務局（泉森部長） なるべく多くの方に見ていただくという形で調整してまいりたいと思います。
- 餅木議長 それでは視察の話に進みますが、広島県福山市への視察ということで。
この常石小学校には、今後のコロナの状況次第ですけれども、訪問をさせていただけるといこと、福山市教育委員会にも行ける。輦の浦学園は、これはお話を聞くぐらいですかね。校内フリースクールは行けないけどお話は聞けますか。
- 事務局（八木課長） そうですね。
- 餅木議長 この辺りのことについて、先ほどの事務局からの説明に質問はありますか。
福山市の方は事前に質問があったら聞いておきたいということですね。
- 事務局（八木課長） はい、事前質問がございましたら、こちらのほうからお聞きすることは可能ですので、この場でいただいてもいいですけども、後日でもまだ間に合うと考えています。
- 餅木議長 はい、分かりました。
- 船橋委員 一つお伺いしたいことがあるんですけど、津久野中学校でも、リソースルームとって、不登校の生徒のために、いつ学校に来てもいい、いつ学校から帰ってもいいということで、月曜日から金曜までの週 30 時間、教員が一人、その教室で生徒に勉強を教えたり話を聞いたりということをしています。ただ、その業務をやっているのは、定数内の教員です。だからこの「きらりルーム」というのは、さっき山口委員もおっしゃっていたように、予算がないというなかでなんですけど、どんな予算をつけて、どんな人の配置をしているのかというのを聞いていただけたら、堺市の多くの学校が、こういう取組を取り入れられるのではないかなと思うので、ぜひ予算、人の配置等を聞いていただけたらと思います。
- 事務局（八木課長） はい、承知しました。
- 餅木議長 お願いします。ほかにありますか、黒田委員。
- 黒田委員 聞いていただきたいことが1点あって、ここまでがらりといろいろ変えるには大分意識改革というのか、教員の方もはじめとして通常の学校ではという固定概念にとらわれていたら、こういうことは実現しなかったと思いますが、そういう教員の意識改革に向けて何か、アプローチしたことがもしあれば教えていただきたいですし、あと予算というものもおっしゃっていましたが、ここまでの予算はどういう形でつけられたのかなというのは非常に気になるところがございます。以上です。

○餅木議長 予算は大分かかっているのか、かからずにできているのかということですね。

○黒田委員 そうですね。工夫された点とか。

○餅木議長 イエナプランができるので、本当に普通の学校の予算でできるのであれば、ぜひ、今後広げるべきものがあるだろうと、日本の教育を変えないといけないだろうと思いますけど、それはもう膨大なお金がかかるとか、人的にすごく人を配置しなければならないとかであれば、それはまだまだ実現が難しい。30人学級をするやら、しないやらという話もありますが、ぜひ、その辺りが実現可能なのかどうかということを知りたいと思います。

ほかに、もしご質問されたいことがありましたら、事務局のほうにメール等で送ってください。

○事務局（八木課長） まだ、これからも連絡等のやりとりがありますので、お気づきになりましたら、メール等いただけましたら結構ですので、よろしくお願いします。

○餅木議長 はい、本当に還元できるような視察ができればいいなと思いますので、よろしくお願いします。

最後に、我々の、この今期の取組を、今回もこうして新たな取組をするわけですが、それをどの様にして総括していくかという件ですが、先ほど林副議長からは、我々が、それぞれの見たこと、感じたこと、みなさんに伝えたいメッセージを残して、それを何かの形で、メディアといいますか、ホームページで上げるとか、そういった方向はどうかということ、それからYouTubeというのもありましたけど、いかがでしょうか。

○山口委員 もちろんYouTubeとか、SNS上でお金をかけずに、上手に情報発信することはいい方法だと思います。今の子どもたちはテレビを見ないので。

○餅木議長 見ないですね。

○山口委員 延々YouTube見えていますもんね。お風呂にまで持って行って見えていますから。やっぱりできる限りお金をかけずにやれる発信はどんどんやっていくべきだと思いますし、先ほど林副議長がおっしゃっていたように、委員それぞれが「ぶらり社会教育」を書くというのもいいですね。あれよかったですね、ブラタモリみたいで。

○餅木議長 よかったですね。

○山口委員 例えば阪南市の取組を委員それぞれがまとめるとかね。今日、実はウィズコロナの時代の新しい生きた方みたいなことを、女性団体のリーダーズサミットで、やっぱりワールドカフェをするんですよ。仕切り入れて、人数はいつもより半分になりますけど、そういうトライをしながら、やっぱりこのウィズコロナの時代の人との「つながり」を、どう持つかということも、もう一つみなさんまだ分からなくて、私たちも模索状態なので、そういうテーマでの記事を書くのであれば書けますし。

○餅木議長 ぜひ書いていただきたいですね。

この状況がいつまで続くか分からないですけど、ここで学んだこととか、きっと生きるでしょうから、ぜひ、そういった視点で、特にみなさんの持っている視点というのは、SDGsの視点とか、人権の視点とか、そういうのがあるので、ぜひその辺りを生かしてウィズコロナ時代の社会教育の発信ができたらいいですね。社会教育として何を発信したらいいのかなというのは、随分悶々として僕も考えていたんですけど、この機にそういったことも載せられたらと思いますので、またお知恵を貸してください。よろしくをお願いします。

社会教育委員会議の方向性としては、お金をかけずに発信していくということをコンセプトに、平田オリザさんの講演会につきましては、当事者の方にも参加していただきたいということで、これもネットでしたらお金かかりませんので、またできるのであればそういったことも含めて検討していきたいと思います。

○山口委員 参加者の参加の仕方もリアルタイム参加と録画も撮っておけば、いつでも家でも見れるというような配信の仕方もあると思うので、ご検討いただけたらいいと思います。

○餅木議長 そうですね。

○山口委員 多分、学校の先生はお忙しいので。

○餅木議長 そうですね。

○山口委員 私の自宅の前に学校ありますが、本当に先生方は朝の6時半とかに学校来ておられます。帰るのを見ていたら夜の11時半ですよ。誰が歩いているのかと思ったら学校の先生とか、そういう実態もあります。多分、広島県ではちゃんとしているのかもしれませんが、堺で新たに「きらりルーム」みたいなのをしようと思ったら、誰か特定の先生とかに負担が多分大きくいくんだと思います。だからそうならないのかどうかをちょっとご確認いただきたいです。

○船橋委員 そうですね。

○餅木議長 学校内のフリースクールというか、適応指導教室のような場所は本当に必要ですよ。子どもの居場所は家だけではないです。やっぱり学校も大事だと思います。

議論は尽きませんが、時間が参りましたので、これをもちまして第2回の社会教育委員会議を終了したいと思います。

どうもみなさん、ありがとうございました。

(午前 11時27分 閉会)